

人文会 ニュース

業務用

最近の再販問題について……中平千三郎…(1)

再販制度の観点からみた出版業(抜粋)……(4)
〈公取委事務局の調査報告から〉

「魅力ある書店」を目指して…柴田 信…(8)

一万五千坪の本屋 ……小川 道明…(10)

人(読者)と人(店員) ……海地 信…(13)
とのふれあいを

特約店の選定を終えて ……特約店委員会…(16)

九州地区研修旅行から ……販売委員会…(19)

「新刊案内」の活用を ……宣伝委員会…(20)

わが社の人文書 ……会員社19社…(21)
—本年の足跡と明年への展望

'78. 12

22

社会思想社

孤独 — 愛情恐怖症

J・タンナー著 新里里春訳 四六判／一、〇〇〇円

孤独でない人間はいない。孤独は人間の条件である。この孤独については、古くから今日まで多くの言葉が費やされてきたが、独創的で美しいものを生み出すと、ときには死をさえ含む不条理なものを生み出す孤独というもの。孤独の本質は、なお究め尽くされておらず、孤獨といふは、孤独がどんな場面で、どのように生じるのか、カウンセラーの著者が、多くの事例をもとにこれらの問題に答える。

自己実現への道

交流分析(TA)の理論と応用

M・ジェイムス他著 本明寛・深沢道子他訳 四六判／二、〇〇〇円
自己を知って他人を理解し、人間関係をスムーズにするテキスト

東京都文京区本郷1-25 03(813)8101

勁草書房

長谷川 宏

ことばへの道

言語意識の存在論 ことばの諸相と人間のあり方との関わりをこねられた文章と明晰な論理で綴る省察の書。 1900円＋200

糸 康弘

ドイツ観念論の歴史的格

ドイツ観念論に特有の哲学的構えはなぜ生れたのか。哲学と現実のぎりぎりの関係をマルクス主義の側から解く。 1500円＋160

今井・尾崎・橋川他編

尾崎秀実著作集 4

全5巻・第4回配本 愛情はふる星のごとく(全)、上申書および未公開書簡を収録。解説・青地辰、解題・柘植秀臣 3800円＋200

東京都文京区後楽2-23/振替東京5-175253

児童読物よ、よみがえれ

山中恒 子どもは本を読むのか嫌いなのではなく、読みたくない本ばかり押しつけられているうちに、ほんとうの本嫌いになってしまうのだ。子どもたちを魅了する物語を書きつけ、第一回巖谷小波賞を受賞した「児童読物」作家の、待望の初エッセイ集。 1200円

こんな絵本があった

〈子どもの本のさし絵の歴史〉

W・フィーヴァー 青木由紀子訳 1800円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12 電話(255)4501

戯れのエクリチュール

足立和浩著 一六〇〇円
「偉大な課題にとり組むのに、遊びで戯れよりもつとめよい組み合わせは知らない」(ニーチェ)を踏えた著者が、意識的に既成の知と秩序との闘争を目論み、知の殿堂に火を放たんとする言葉の(へあそ火)——近代合理主義批判。

根源の彼方にグラマトロジーについて

J・デリダ 足立和浩訳 各二〇〇〇円
永く西欧精神を支配してきた人間中心主義的、ロゴス中心主義的な哲学・科学を超える巨大なエクリチュールの学。

A・ブルトン 足立和浩訳 二〇〇〇円

現代思潮社

東京都文京区小日向1-24 電話(943)4406



最近の再販問題について

— 公取委との交渉経過と問題点

人文会会長 中平 千三郎

第三次日本出版界友好訪中団に参加し、所用のため一行より一日早く啓徳飛行場をとりつた。CAPだが、機中のサービスとして日本の新聞が配付される。二週間ぶりの紙面に目をやると、とびこんできたのが公正取引委員長の発言だという再販廃止宣言である。この日が十月十二日で、記者会見はその前日十月十一日のことである。それから一ヵ月たつて十一月七日、出版業界の代表として書協の下中理事長、取協の石川会長、日書連の松信会長と雑協は再販委員会の本吉委員長がうちそろつて橋口公取委員長に面接し、はじめて業界の見解を手交した。

この間の経過をたどると、まず十月十六日

日書連は書店新聞の号外速報として、はがきをもつて傘下の全国書店に到達し、新聞報道に惑わされることなく定価販売を守らうと、その態度を明らかにした。取協は石川会長が東販社長として日経産業新聞に談話を発表し(十月二十五日)、再販制撤廃をいきなり持ち出すのは業界の混乱を深めるだけで、利益はないと思ふと反論した。書協はまだ発言していない。

書協・雑協・取協・日書連の代表者によつて組織されている「出版物公正取引協議会」というものがあるが、たまたまこの協議会の全体会議が十月十七日に予定されていた。のちにふれるが、再販契約ならびに再販励行委

員会の規約改正が主題であったが、当然話題は公取委員長の発言に集中する。事態の急転にいかに対処すべきかということで、新聞報道はともかく、まず委員長発言の正確な内容の把握が必要だということから、石川(取協)、藤原(日書連)、中平(書協)の三人が長谷川取引部長に面談することになった。

委員長発言に先立って十月二日共同通信の「トクダネ」として、公取委員会の再販廃止の意向が報道され、東京ではサンケイ新聞が大きく取上げ、地方各紙のなかには一面に大々的にとりあつかうところもあったのである。たとえば河北新報もその一つである。日書連の増売委員長である仙台金港堂の藤原社

長が、大きなショックをうけたのは当然のことといえる。そこで同氏は早速八方手をつくして橋口公取委員長との接触をはかったが果さず、代って長谷川部長を訪問することになった。これが業界としてはじめての公的対公取委に対する対応である。

公取協の会合のあとただちに狸穴の公取引部に向い、長谷川部長と面談した。業界は委員長発言に驚き、とくに小売書店の混乱は容易ならぬ事態の惹起が予測されるが、委員長発言の正確な内容を提示されたいと迫ったところ、待つてましたとばかりに長谷川部長が口を開いた。

委員長は再販を撤廃するとはいっていない。ただし世界各国の再販制度の推移から、わが国においても撤廃の方向にある、ぐらいいったかも知れない。出版物の流通について返品増大とか、大手取次による寡占等、検討すべきことがあるから研究していきたいとの趣旨の発言をしたのだが、これも定例会見の終りぎわに、ほんの一、二分ふれたことだ。委員長もなぜあんなに大きく新聞が報道したのか解らないといっている。ただし長谷川部長は中坐したので直接はきいていないとのこ

とである。では発言の正確な文書がほしいというのと、文書は配布していない。新聞によって表現等はまちまちだが、各社に共通しているものは事実を報道しているのだからという。なかでも、本の値引きを要求してよいということは間違っていない。公定価格ではないのだから当然であって、私などは定価で本を買ったことはないとまで断言する。業界が混乱しても委員長の発言は間違っていないし、報道のいきすぎ、誤りがあるとするならば新聞社に抗議すべきである。問題は今回の報道ではなく、今後の公取による出版業界の調査が重要であり、その結果によっては法改正を前提とした行政指導があるだろうという。

先年、医学書の定価改訂に端を発し、二度にわたる公取の調査が行われたが、その結論として、現行再販制度によって消費者は不当な損害はうけていないという報告が発表されているが、それとこれとは別問題で、前回は調査不十分で結論も妥当ではなかったという見解を表明し、またここ数年ひきつづいて検討している再販契約、委員会規約の洗い直しも直接は関係ない、別途の調査をはじめるので、いま委員長に会っても意味がない

だろうというのが当日の結論であった。念のため霞力関の公取委員会に赴き、文書課で、発表文書を求めたが、あつさりないという返事をもたらただけであった。

公取協専門委員会は、前述の再販契約、委員会規約の改正を公取取引課から要求され、その原案の提示をうけているが、なかでも重要なのは、現行の出版社(甲)と取次店(乙)との契約における第三条「甲及び乙は本契約と同主旨の契約を締結しない小売業者及び取次業者に出版物を販売しない。」について、甲をはずせという指示である。これは出版社は契約しなければ、本を割引ぎ販売してよいということである。もう一点は、勸行委員会規約の第十条「委員会は再販売価格維持契約に違反した事実の報告を受けたときは遅滞なくその事実を調査しなければならない。」という活動を当事者から意見を求められたときに限るといふ改訂である。その他いろいろあるが、この一点を譲れば、再販契約は殆ど有名無実となるおそれがある。

だがこのような条文いじりは、どこかにふつとんでしまいそうになったのが今回の委員長発言である。だから専門委員会で作成した

「出版物について再販制度を必要とする理由」などではもの足りないとして、新たに「出版物再販制度についての業界の見解」をまとめた。結論は「文化財の公正な伝達を保全し、読者の利益を擁護するため、現行の出版物の再販制度の廃止の方向に対し、われわれ出版業界は強く反対するものである」(十月三十日)。

記者会見をしてぶっつけに発表する前に、もう一度公取委員長の見解をただそうという意見があり、その前提として、筆者がこれまでの出版業界の事情に精通している後藤委員に会い、事務局長に面談することをすすめられたが、その後いきなり委員長との会談となった。

下中、本吉、石川、松信の四代表に書協、日書連の事務局長がつきそって、橋口委員長と会談したのは十一月七日である。この席に川井取引課長が同席しているが、ほとんど発言はなかった。

まず「見解」を手交したが、委員長は公取の基本姿勢として、従来の生産、製造面ばかりでなく流通面に着目し、昨年の独禁法改正の方向にそって法の運用をはかりたいとの意

向をのべ、その一環としての今回の発表だという経過の説明があった。その後業界に対する疑問が、一著者としての個人的体験をも通してのべられたが、問題ごとに業界の実情を説明したとのことである。

以上が橋口発言以後一カ月の経過であるが業界には具体的な変化はとくに現われてはいない。書店の店頭で値引きの要求しても書店がこれを拒否すればそれまでのことであるが、実際問題としてそのような要求は皆無とってよいであらう。それだけ定価販売が定着化しているともいえるが、いちいち値引の交渉をするというわずらわしさが先にたつて、そんな時間も手間もお互いにならないのかも知れない。だが官庁、会社等の職場における割引販売は当然のこととなっているのも反面の事実であり、その意味ではすでに再販制度は崩壊しかけているともいえる。

婦人誌の新年号の割引販売がここ数年再販委員会における違反調査の中心であったが、今年はどうだろうか。スーパー等で一括割引きとなった場合に、はつきりと出版物だけが除外できるだろうか。もともと定価販売というものは、大正初期における雑誌の割引き競

争につかれはてた書店が、大取次の指導のもとに相互規制として生まれたものであり、今日の日書連の前身、全連は定価販売の確立を目的として結成されたものであるから、大正八、九年から今日まで出版界にあっては定価販売があたりまえということになってきている。もっとも戦中、戦後の一時期には若干の混乱があった。昭和二十八年に改正された独禁法の除外例にもつき、再販制を昭和三十一年に実施するにいたるのだが、これも基本的には出版業界の実態を法が追認したにすぎない。前記の公取委員長谷川部長は、著作物が法定再販品であるのは、出版物は点数が多いから届出制は事務繁雑のためできないし、一点一点が独自の内容をもって、いわゆる競争商品にはなりにくい性質をもっているからだといっている。だが再販をはずそうという意図は、再販制度それ自身が時代にもなつて維持が困難になってきたということと、消費者の要求が強くなってきたことが影響しているだろう。

制度だから一定不変であるとはいえない。しかし鄧小平氏のように、次のかしい世代がうまい解決をするだろうというものも一

つの見識には違いないが、先人の智慧という
のも尊重する必要がある。近代出版業の発
展において、再販制度のはたした役割は大き
い。廃止することはどちらかといえば容易で
ある。だが一度廃止したものを再び復活す
ることはむづかしい。

復活といえは、定価の奥付表示が要請され
たものの、一旦はずしたものはなかなか戻ら
ない。これはあまり適切な表現ではないが、

〔参考資料〕

再販制度の観点からみた出版業

——公取委事務局の調査報告から——

昭和五年五月二四日付けで公取委事務局
が発表した「再販制度の観点からみた出版業
の実態について」（B5判・二六頁・タイプ
印刷）という調査報告がある。今回の公取委
の出版物に対する再販廃止の意向表明と関連
して興味深い点が多いので、その中の必要部
分を参考としてここに掲載してみることにす
る。

定価表示を公取から強要されたという印象を
もっているが。あの時には再販制度を維持す
るためには定価表示が必要だということだっ
た筈。その舌の根もかわかないうちに、公取
の委員長が再販の廃止を論ずるなど、どうも
腑におちない話である。

大岡越前守の昔から為政者は、言論、出版
報道ということにたいしては常に規制の対象
としてきている。今日の再販問題もそのよう

一 出版物の再販売価格維持
行為と独占禁止法

(1) 再販制度と独占禁止法

独占禁止法第二四条の二の規定に基づき、
特定の種類の商品については再販売価格維持
行為が同法の適用から除外されている。その
対象商品には、公正取引委員会の指定を受け

なにおいがないわけでもない。現在の出版
業界がかかえている幾多の矛盾が、再販制度
にすべて由来しているとは思われないが、折角
公取のヤラセにマスコミがのつかったのだか
ら、なんらかの対応を考えなければ、思わぬ
どろ沼にはまりこみそうだ。消費者ではなく
て読者はなにを期待しているか、それをはっ
きり見さだめることが肝腎だろう。

(昭和53年11月21日)

ることによって除外となるいわゆる指定再販
商品と法律の規定中で直接適用除外が認めら
れている著作物（法定再販品といわれている
）がある。

独占禁止法の適用を除外される行為は、
「再販売価格を決定し、これを維持するため
にする行為」であるが、「一般消費者の利益
を不当に害することとなる場合」及び「その
商品を販売する事業者がする行為にあっては
その商品を生産する事業者の意に反してする
場合」には、適用除外とならない。また、指
定商品及び著作物のいずれについても、消費
者、勤労者の互助を目的とする消費生活協同
組合等の団体に対して販売する場合には、再

販売行為は適用除外とならない。

指定商品について再販行為を実施しようとする事業者は、その契約の内容を公正取引委員会に届け出ることが義務づけられているが、著作物についてはその届出義務はない。

(2) 本調査の目的と対象

ア 公正取引委員会は、昭和四六年四月に発表した方針(参考資料)に従い、再販制度による弊害の規制に努めているが、法定再販商品に関しても、再販制度によって不当に小売価格が高くなっているのではないかと批判があるので、まず、昭和四七年一二月、新聞について(独占禁止懇話会でも報告)、次いで昭和五〇年、医学書等の専門書について、実態調査を行った。今回は、これに引き続き、書籍一般及び雑誌について、出版社、取次及び書店を対象として調査を実施した。

イ 本調査の対象は、次のとおりであり、調査対象事業者の各業界における総売上高に占める割合は、出版社で約五五%、取次で約九〇%、書店で約一三%となっている。

一 調査対象事業者

(1) 年間書籍発行点数五〇点以上の出版社——アンケート発送社数六五社

回答社数四九社

(2) 従業員数四五人以上の取次——発送社一五社 回答社一三社

(3) 月間売上げ一、〇〇〇万円以上の書店——発送社一八八社 回答社一〇八社

二 出版社の分類

大手一〇社——売上げの多い順に

(1) 一〇社

「その他の出版社」——大手一〇社以外の出版社

(2) 書籍中心の三三社、雑誌中心の五社——それぞれ、書籍、雑誌のウエイトが五〇%を超える出版社

(3) 専門書出版社九社、文学書出版社九社、児童書出版社四社、学習参考書出版社二社(「学参」と略称)——それぞれ、書籍全体に占める当該部門の書籍のウエイトが五〇%を超える出版社

(4) 週刊誌出版社——雑誌全体に占める週刊誌のウエイトが五〇%を超える出版社

三 取次の分類

二大取次——売上げの多い順に二社

六大取次——売上げの多い順に六社

「その他の取次」——六大取次以外の取次

四 書店の分類

三大書店——売上げの多い順に三社

「その他の書店」——三大書店以外の書店

五 調査時点

昭和五一年九月一日の時点(損益計算等一定の期間を対象とするものについては、同日前に終了した各社の事業年度)で報告を求めた。

ウ なお、今回の調査では、①比較的大規模な事業者を対象としたため、零細出版社及び零細書店の状況が十分に反映されていないおそれがあること、②書店業界についての調査事項は簡単なものであったこと、③出版業界における統計資料が整備されてい

ないこと等の制約がある。そのため、この調査結果のみで出版業界における再販制度について結論的な評価をすることは、十分でない面もある。

二 出版業界の概要（略）

三 取引の概要（略）

四 再販売価格維持行為の実情

(1) 再販契約の締結状況

ア 出版業の再販契約については、口頭の契約もかなりみられるが、文書を取り交わしているもののウェイト（文書契約締結取引先数／総取引先数）は、出版社と取次間で六一％、取次と書店間で八二％となっており、後者の方が締結率が高い。

また出版社についてみると、大手一〇社の締結率が高く「その他出版社」は低い。出版物の再販契約は、個々の点数ごとではなく、一社単位で一括して結んでおくという方法がとられている。そのため、出版社は、特定の出版物だけを定価維持の対象から外すことは、実際上できない。

<表5>

取次と書店	出版社と取次
1. 取次は、出版社と締結した契約に基づき書店との間に再販契約を締結する。	1. 出版社は取次に対し、その取引する書店と出版社の代理人として再販契約をする権限を付与する。
2. 書店は、出版社の指定する定価を厳守し、割引に類する行為をしない。	2. 出版社及び取次は、再販契約を締結しない書店及び取次に販売しない。
3. 取次及び書店は、再販契約を締結しない書店に販売しない。	3. 出版社は、直接需要者に定価より低い価格で販売しない。
4. 取次は、直接需要者に販売しない。	4. 取次は、直接需要者に販売しない。

イ 実際には実施されている再販契約は、後述する再販売価格維持契約勸行委員会の作成した様式につめたものであり、その主な内容はこのとおりである。（表5）

ウ 再販契約を締結している書店で販売される出版物の中に、出版社が取次と再販契約を結んでいないものも含むが、これらが明確に区別されることなく流通している。

しかしながら、再販契約を結んでいない出版社においても、再販制度を続けた方がよいと考えている社がほとんどを占めている。独占禁止法第二四条の二により、取次は出版社の「意に反して」再販行為を行うことはできないが、再販契約を締結していない出版社でも自己の出版物を取次が再販対象とすることに反対しているわけではないので、この場合における取次の再販行為も法律違反とはいえない。なお、一部の中小出版社は、再販商品でないものが部分的にあってもよいとする見解を持っている。

(2) 再販契約の実施状況

ア 実際の再販契約違反に対して、出版社及び取次は、契約で定められた制裁措置をとってはいないが、その理由としては、①定

価遵守の商慣習が確立し、廉売の発生が著しく少ないこと、②廉売が起った場合でも、再販売価格維持励行委員会の強力な説得、指導により防止されていること、③取次の力が強い場合が多いため、注意程度で解決すること等が挙げられている。

イ 出版業界には、再販の適用除外制度が許容された当初から、再販制度の啓蒙、宣伝、指導を主旨とした再販売価格維持励行委員会が設けられている。これは、書協、取協、日書連のそれぞれ、一〇名ずつの委員によって構成される全国的組織としての本部と、県書店組合を基盤とした各県支部とから成り、委員会規約を制定し、再販制度について解説、指導のため「再販白書」を発行し、関係事業者に配布している。

五 価格状況（略）

六 まとめ

調査結果の要点をまとめると

(1) 再販契約の実施状況

ア 出版社と取次間では六割強、取次と書店間では八割強の割合で文書による再販契約

が締結されている。この他口頭による契約もかなり行われている。

出版物の再販契約は、対象たる出版物を特定せず、一社単位で包括的に締結されている。再販契約を締結しない出版社もあるが、流通段階においては、その出版社の出版物も再販契約の対象商品と明確に区別されていない。

イ 再販契約に違反するような値引き販売の行われる事例は非常に少なく、また、発生した場合でも、契約に定められた制裁措置に至る事例はほとんどみられない。

これらの再販契約の内容は、出版社、取次及び書店の各業界が共同して組織した事業者団体である再販売価格維持励行委員会の定めた様式に倣ってほぼ一律に定められている。また、契約違反の調査その他契約を遵守させるための措置は、ほとんど再販売価格維持励行委員会によって行われている。

この再販売価格維持励行委員会の行為については、行過ぎのないよう指導する必要がある。

(2) 定価の状況

最近の出版物の定価、マージン、リベート、広告宣伝費等の状況について他業界とも比較しつつ検討してみると、全体としては、特に過大であるとは認められず、独占禁止法第二四条の二の「一般消費者の利益を不当に害する場合」に該当する状況ではない。

しかし、コストの増大あるいはマージン率引上げの必要性を理由にして安易に定価引上げを行うことのないよう、今後も注意する必要がある。また、昭和四九年頃の物価高騰の時期に、書籍の奥付の定価記載をやめ、既に発行されている書籍あるいは返本されてから再出荷する書籍のカバーを取り替え、値上げした例、分割配本される百科事典等について一方的に当初広告した価格を引き上げた例等があったが、このような値上げの仕方には問題がある。

(3) その他の問題

返本によるロスが相当額に上っており、この面についての合理化対策が論議されているが、再販制度の硬直的運用によりそれが阻害されないよう注意を要する。

「魅力ある書店」を目指して

岩波図書販売
信山社 柴田 信

書店で働く私たちにとって、多くの読者（お客様）から、「魅力ある書店」と評価されることは、なにもまして嬉しいことの一つです。だから、『人文会ニュース』78年9月発行の21号「読者にとって魅力ある書店とは」という特集は、たいへん興味深く読みました。ここに登場しているかたがたは、言ってみれば、その筋の方で、書物に関しては達人の域にある人達です。それだけに、「同じ顔の店ばかりでは面白くない」という書店の個性化を求める声「店員の商品知識を含む接客サービスの欠如」を叱る方、「求める書物をゆったり探索できる大型書店待望論」、「量より質、人のむらがない片隅の書棚に、文化価値を見出そう」とする意見、「店主を含む書店員の、接客サービスを越えた人間性とのふれ合い」に魅力を感じる人、等々、極めて

示唆に富んだ数多くの意見を知る事ができます。しかし、同時に、最近の読者の、著しい価値感の多様化が、ここでも感じられます。53年10月30日付の「週刊読書人」の中で、日書連会長の松信泰輔氏が、「――略――ある本はあるけれどもない本はない。つまり、大は大通り、中は中なり、小は小なり、みんな通りの書店ということですよ。昔は出版件数が少なかったですから、それで済みましたけれども、最近みたいに出版件数が多くなったら、売場面積が毎年一割や二割増えたぐらいでは、それを展示するのに対応できない。読者はまた、ものすごく価値感が多様化してきている。選択の幅が広がってきている。選択が厳しくなってきた。そういう社会情勢の変化に、この流通形態がいままで対応してやっっていない。全く型にはまった形でしか対

応できていない。――略――」へ傍点は筆者と述べておられます。つまり、書店をかこむ状況として、読者ニーズの多様化と、一日70点にも及ぶ新商品（新刊）の発生、それらの変革に追い付けない流通の問題等が、複雑にからみ合って、書店の現場にいる私達の前に横たわっているのです。限定されたスペースにもかかわらず、商品の流動のはなはだし小売書店の現場から、「魅力ある書店」を目指そうとする時、それ以前に、理想とはうらはらに、膨大な作業量を、日常業務としてうまずたゆまずこなしていかなければならぬという現実には突き当ります。そして、その部分を抜きにしては、一歩も前に進めないというのが、多品種少量商品の最たるものである（本）を商う小売書店のいつわらざる実感であると思います。それぞれの小売書店が、それぞれの与えられた条件のもとで、日常業務を通して、いかに個性性をきわだたせ、特色を打ち出していけるかという課題は、現在急務でありましようし、又、そのところが突きつめる以外に、真の意味での書店づくりはありえないと思われまます。こうした現実を見ずえた上でなければ「魅力ある書店論」

も、出発できないのではないでしようか。

さて、「書店の魅力」を語ろうとするとき、読者からみて、可視的な部分と、不可視的な部分との二つを考えることができます。前者は、お客様との実際の応待・店舗外観・店内レイアウト・照明等、目に見えるサービスであり、後者は、書棚の中味を通したお客様とのコミュニケーションです。どちらも対面販売上欠くべからざる車の両輪であることを深く認識し、技術的にも絶えざる精進が必要です。一方、書店の側から見て、前述の可視・不可視のサービスを含んで「魅力ある書店」を突きつめようとすると、いかに読者が価値あると考える商品を迅速に提供しうるかというところに到達します。それは私ばかりでなく、全ての書店の現場にある者の最優先販売政策である筈です。勿論、小売書店の最終目的は、適正な利潤をあげるところにありま

す。つまり、多様化した読者ニーズに応えながら、適正な利潤をあげる販売政策の具体的方法論を見出す必要があるのです。

責任販売制についての論議がかまびすしい昨今、従来のように、大量仕入・大量返品をくりかえしていることは、書店の労務問題を

ふくめて、あらゆる意味で許されにくくなってきています。状況の変革が、経営体質及び財務体質の改善を迫っているのです。さらに、顧客ニーズ(商品)への迅速な反応が、販売政策の第一義であるとすれば、書店づくりに関するあらゆる課題は、そこに収斂していくと同時に、さまざまな問題はそこから又派生してくると思われれます。このさまざまな問題の中で、販売政策の具体的方法を見出すには、書店の新しい組織づくり、生き生きしたシステムを作らない限り、その解決のトバ口にも至らないと思います。すなわち、書店の組織を管理と販売の両部門に分離し、かつ、それを販売の側から統合化しない限り生きたシステムは生まれません。そして、生きたシステムのもとで、はじめて売れ筋の発見(顧客ニーズの把握)が、なし得るのだと私は考えます。つまり、顧客ニーズに合った商品を用途別に分類し、そのジャンルに、(担当者)の固定化・在庫量の把握・売れ筋の法則性の発見、売れと仕入れのバランス・スリップ管理・売上ベスト作製・発注業務・返品商品の指名、等(すべて)の日常業務を集約させ、さらにそれを統合するといったシステ

ムづくりを推進させることが、「魅力ある書店づくり」につながる道にほかならないと考えます。(具体的方法は拙著『出版販売の実際』及び書店経営77年9月号参照)

つまり、多種多様で個別的な(本)の中からは、常に新鮮な顧客ニーズを表出し、売上げと利益をもたらす、具体的な商品名を発掘し、それを把握していくための、意識的な書店のシステムづくりを徹底化する以外に、どんな方途で「魅力ある書店」をつくるのか、迷うばかりなのです。

こうしたシステムづくりは、すべからく計数によって管理されていますが、同時に又、書店の現場においては、一人の書店員の業務が、全て計数によって計れないのと同様に、一冊の本の持つ存在感(計数をはるかに越えて)圧倒的です。それだけに、本の販売という仕事は、その奥行きは限りなく深く、その魅力はくめどもつきぬものがあるのだと思われてなりません。個々の書店員が十全に生かされるシステムの中から、個別的な(本)の堆積が生れ、それが、相互に関連し合って、力をつけ合い、ひきたて合い、あたかも一つの世界を実現し、棚を通じて読者と語り合える

「魅力ある書店」への道が拡がります。しかも、それらの商品群は、生き生きとしたシステムから生れていますから、必ずや、売上げと適正な利潤を獲得できる筈です。そして、更に、この不可視的部分の完成が、可視的部分のサービスまでを完べきにすることは必定です。

与えられた紙数が尽きました。若干舌たたら

一万五千坪の本屋

——読者に魅力ある、私の夢の店——

オーディオ・サウンドの世界では、評論家に好評な製品でないし売行き良好でない、という話を聞いている。

それほどに、ステレオ・マニアは良質な音や条件を求めて狂奔しているのである。そのためになにかがあるか。アンプでありチューナーである。勿論プレイヤーはいくらでもない。プレイヤーを完全なものにするために、アームやカートリッジに気を使う。ターンテーブ

ずでしたが「書店の魅力」について私なりの考え方を述べてみました。前述の通り、書店の現場は、問題山積です。とは申しましたも、「魅力ある書店」を目指して、先づ目の前の問題から手をつけ、一步一步、その理想に近づかなければなりません。多くのかたがたのご教示が仰げればと念じております。

(53・11・5)

西武百貨店書籍部 小川 道明

ルを駆動するためのモーターから、レコードをのせるゴムの材質まで云々されるのである。

スピーカーにいたっては、今ここで何十万言を費しても語り切れるものではない。語っているうちに又ぞろ新製品が登場する。その上にリスニングのための部屋が問題となる。そうなると自宅の構造から環境までを手直しせねばならず、永遠の青い鳥を求めてマニア

の行進は果しなくつづくことになるのである。

* * *

『人文会ニュース』の21号は、「読者にとって魅力ある書店とは」という特集をとりあげていた。それぞれに貴重な体験にもついでご意見で傾聴させて頂いたが、読書好きの人はオーディオ・ファン同様に、見果てぬ夢を追いつづけて欲望が次々に広がる人なのだという実感を強くした……。探している本の必ずあるように、売場は広ければ広いほどよい。しかしただ広ければよいというものではない。分類がカチッとしてくれてなくては探しにくくて困る。また探しても手垢でヨレヨレなんていうのは駄目。ストックが万全で、オビもグラシムもピンとしていなくては買う気がしない。新刊書は処女性が大切なんだ。注文した本は即入手して欲しい、二週間なんて論外だ……。

読者にとって魅力ある書店とは？ ある意味では答えは簡単である。なぜなら本屋の仕事に従事する人間は、たいていなんらかの形で本好きだからである。本好きな人間が、今度は攻守とことを変えて、一読者としてどん

な本屋が望ましいか、という青写真を思い切り画いてみればいい。それに加えて、つねづね毎日の店頭でお客様からタラタラ文句をいわれていることを充足させるような店をつくら、なんとか求められている課題に答えられるのではないか? せいぜい戯言をいわせて頂くが、「邯鄲は夢の枕」というのが話の落ちかも知れない。

とにかく読者と気取ったものである。昨年だったか、店頭について『食道楽』という本を探してくれ、という注文がたまたま二、三人つづいた。はじめは「入っておりません」とお断りしていたが、度々のことで詳しく聞いてみると、著者は村井弦斎、ようするにNHKのFM放送で連続で朗読された本と解った。評判がよいというので、追っかけ柴田書店などで復刻された早さにも驚いたが、こんなことは日常茶飯事である。

読んでいる本に引用されているから、と平気で二十年も前の本を探させる。馴れた社員なら判断もつこうが、パートや新入の女子社員などは店頭を走りまわる破目になる。また夏休みの課題図書に、自分が青春時代に感激した本を指定するのはいいが、それが絶版に

なっている岩波新書だったり、知らない中高生が何人か不安そうにかたまつて書店廻りをする結果になる。

そんなことで八重洲ブックセンターがすっかりマスコミの話題となったわけだが、あれでもまだ不十分であり満足いかない。夢をいわせてもらえば、やはり国立国会図書館なみの規模だ。面積一万五千坪、収容図書数約三百万冊と聞いている。私家版か舶来ボルノ雑誌を除いて、どんなお客様の無理も聞けようというものだ。

しかし、いくら広くてよいといっても、一冊の本を探すために、一万五千坪を歩かせられては又ぞろ文句が出よう。書店員としても本探しに駆け廻らされては、ジョギング流行の時代とはいえ、身体が持つものではない。店頭にいると、お客様のボールはどこからでも飛んでくる。「熊」という字のある書名で、「草」と名の付く出版社の本となるとクイズめくが、草思社の『はるかなる仔熊の森』であった。

「サウスポーの本」を頼まれた、と年配のご婦人がくる。このタイプが一番苦手である。キャンディーイズ全盛の時代とて、女子社

員はなんのためらいもなくタレント・コーナーにご案内。よくよく聞いて探したら、集英社刊ロスワイラーの『赤毛のサウスポー』だつたりする。家を出る時は『にっちもさっちも』と覚えていたのに、売場に着いたときは『どっちもこっちも』にすりかわって、私どもが走らされるのは、この手のご婦人である。

人文書だつて同様である。アリストテレスの『存在論』を探してくれ、と学生さんに頼まれて、よくよく調べてみたら『アリストテレスの存在論』。著者は安藤孝行先生の研究書であった。警察の初動捜査と同じで、初めにまちがえると苦労するものだ、とお説教する仕末となる。

この十一月に船橋店に新しく西武ブックセンターをオープンしたが、某取次店に千葉県に関する本を抜いてくれと依頼して、ダンボールをあげたとき、千葉周作の本や、吉川弘文館の『千葉常胤』まで出てきたのには驚いた。千葉と付く書名をコンピューターで拾いあげた結果らしいが、いささか考えさせられてしまった。

愛書家というのはとかく天邪鬼である。本は探すものだとおっしゃる。『人文会ニュー

ス』の21号にも、「本を探ず楽しみを味わえる店」という読者の声があった。

私どもが三年前に西武ブックセンターをつくったときにも、本を楽しく選べる空間創りを基本理念の一つとした。年間休日が昭和四八年には平均九〇日であったものが、間もなく一五〇日をこえようとしている。私どもの池袋商圏三百万人をとってみても、昭和五五年には戦後生まれが六二・八%にも達する。

物があればよい、活字でさえあれば文化的餓えが満たされるといった戦前派は年々交替していつて、余暇を楽しむことが上手で、個人的な戦後世代が主役で登場することになる。

愛書家層のタイプも新旧世代で当然変わるだろうが、本があればよいさ、という書店が敬遠されることはまちがいない。国会図書館なみ一万五千坪の広さを理想として与えられたとしても、なにせ多様化の時代だから、画一的な売場は作れない。「御用とお急ぎの方コーナー」ということで新刊中心の話題書を集めたり、「いつまでも若く美しいコーナー」で美容・健康・家庭医学の類を取り揃えてみたり、分類だって今までの既成概念を思い切つて転換させてみる必要が生れよう。

専門店として、渋谷宮益坂を登った「童話屋」が評判になっている。私も店頭に立つてしばらく見ていたが、洒落れた自家用車を運転してきたヤングミセスが、子どもの誕生日に贈る本についてながと相談していた。買った本の金額はくれたものだが、ここで求めたものは単に本だけでなく、適切な良い本を選べたという「満足」だという実感がしたものである。

ようするに、理想的で魅力的な本屋とは、可能な限り大規模な総合売場と周辺に専門店や常設ブックフェア・コーナーを配置し、検索機能が優れ、書店員が能力高くお客様の質問に適切に応答できる、とでもありきたりに要約されるのだろう。神田村をリファインしてその上にアストロドームのような全天候の屋根をつけ、できれば周辺に取次店と版元の倉庫を集結すればよい、とでもいわれそうで何とも素気ないが、所詮本屋の基本的機能なんてそんなに沢山あるものではない。時代や顧客層の変化にどう対応し、どう決断して新しい要素を導入したかである。

今年の秋も藤沢・船橋とリプロ西武の出店で書店組合の方々と話しあう機会が多かつ

た。どうしても残る違和感は、私たちが別の世界から来た新規参入者の見方である。

私どもでも書籍売場は自営で池袋店に三〇年近い歴史がある。物の本によれば紀伊国屋さんだって昭和五年に炭屋からの新規参入者であった。その新規参入者が今までの書店の概念を変革して大型書店を誕生させた。

今年には八重洲が誕生し、筑摩の倒産があった。また公取からきつい問題提起がなされた。書店組合が自由な出店を規制するような行為をとれば、公取の眼は単に取次だけだけでなく、厳しくその点にも向けられるかも知れない。来年はいろいろな意味で波乱の多い年になりそうな予感がする。思い切った発想の転換が必要なのではないだろうか？ 出版界は出版社と取次店と本屋と三つの要素が一体なものである。景気が下降しているからとすぐ外売に走ったり、それ向き的大型企画を乱発するだけで構造的な危機が救えるのだろうか？ 出版界全体の問題として真剣に考えないと、魅力ある書店どころか、見捨てられた書店の累々たる図を見かねない。書店は流通の川下にいるだけに問題は切実なのである。

人「読者」と人「店員」とのふれあいを

大阪旭屋書店 海地 信

先日のこと、ある書店で本を買いもとめたとき、わたしはとても嬉しい経験をした。別にとりたてていうほどのことでないのかもしれないが、外出先からの帰途、その日のうちにぜひ読みたい本があったので、駅前の小さな書店にとびこんだ。新刊の棚をずっと眺めたがくだんの本が見つからなかった。それで奥のカウンターに座っていたひとに尋ねた。

「その本なら、この間入ってから売った記憶がないから……」とわざわざ店の入口脇まで出て来て探してくれた。

それだけのことである。しかし、このことからわたしはひとつの発見をした。

『人文会ニュース』21号の特集「読者にとって魅力ある書店とは」の声によれば、本が探しやすいこと、品揃えが豊富、店員の正確な商品知識、店員が親切なこと、などが主なと

ころで、その他、店が明るいこと、営業時間が長いこと、スペースがあつてゆつくり選べること、そしてどの意見も個性的であるべきだといったところである。

わたしも常々、まず商品知識を身につけることと心をこめた接客を口にしてている。商品知識がなければ客へのアプローチも消極的になりがちになるから、何よりもまず商品知識をとっている。

21号にも「店員の愛想のいいのに越したことはない。しかし、極端にいえば、書店に愛想を買いに行くわけではないので、なによりサービスの商品は商品についての正確な知識である。」とあった。その通りだとわたしも思うが、前記の経験は、読者の要望のひとつひとつが別のことでありながら、かつ一つのことだということを教えてくれた。

書店員の商品知識が不足というのは、読者の十人中九人までの声である。これは最近のことだけではなく、前々からのことである。ではこういう現状を招来し、読者の声があるにもかかわらず、改善が見られないのはどうしてだろうか。

再販制度に依存していることも一つであろう。殆んどの書店が立地条件に安住していることだ。公正取引委員会が出版物の再販商品からの除外を真剣に考えるようになったのも、消費者⇨読者の利益が再販制度によって、必ずしも守られないとの判断にたつてのことだろう。

それではすべての書店が、品揃えや店員教育をなおざりにしているかというところでない。にもかかわらず読者の満足を得られないのはなぜだろうか。ひとつにはその難しさにもあるようだし、いまひとつは商品の性格にもよるが、どうも出発点にあるようだ。

いまは出版元も、出版産業と出版社に区別してよばなければならないほどに、大小の差が著しくなったが、出版社のルーツは例外なく損得勘定よりも、この本をぜひ出版したいといった志派であつたらう。一方、書店の場

合は志よりも、どちらかといえば商売に儲けることの方が優先しているようで、この本を売りたいといった信念よりも、よく売れる本（これも読者優先になるのだろうか）である。体裁がよくて、返品もできて危険の少ない商売として、選択され出発した店の方が多いのではなからうか。この点、同じ本を商う場合でも、新刊本を売る本屋と古書店では大きな違いがあるようだ。

もちろん商売という限りお客抜きでは考えられないことはいうまでもない。お客のニーズに沿って商品を沢山取揃えねばならない。しかし、売れるか売れないか見当のつかない本や、返品がきかない本は、たとえ内容がいかによくてもまずは遠慮するのが書店一般の姿であろう。もっとも、それには危険負担を書店がかぶるにはマージンが少いことも一因である。いや出版界では返品がきかない本はどういっそうマージンが少い。

さらにそのような書店を育てた責任の一端は取次店にもあるか。見計り送本を主力にした新刊送本がそれである。いわゆる種まき配本という遠隔操縦法が重用されてきた。それも今では、書店の個性を考えないパターン

配本が何の疑問もなく堂々と罷り通るようになった。それをまた殆んど無条件に書店が受けいれざるを得ないのは、毎日毎日出版社からはき出される新刊の量である。それも類似商品の氾濫である。毎日の新刊リストをにらんで、自分の店に必要な本か不要な本かを判断できる人は、そう簡単にみつかるまい。

21号に「かくも大量の新刊洪水に溺れもせず、日々、新顔の本につきあつてゆく根気には、ただもう頭がさがる。」と理解を示して下さる人がいたが、読者の中にどれだけの人がこの新刊の洪水に気づいて下さるだらうか。

出版社がそのシェアを確保するために考え出された常備寄託制度は、セット出荷という形が主流で、どここの街へ行っても同じ顔の書店（規模のちがいはあるにはあるが）が客を待っている。その出版社の合理化に水をぶっかけたのが、今度の「八重洲ブックセンター」である。出版社の営業マンは口々に「売れない本が売れている」と。いや、ひょっとしたら「売ろうとしなかった本が売れている」のではなからうか。

書店の規模が出版物の受け皿として小さかったことはあるが、ここ十年ほどの多店化政

策・大型化はめざましい。急激な膨脹で人の育つ方が追いつかぬのも問題の一つである。

読者の方にも多少の問題はあると考えるのは不遜であらうか。「どの書店をみても、大型・中型・小型の差異による品揃えの違いはあっても、みんな同じ『顔』をしているように思えてならない。」と指摘される書店が、同じ顔で今日まで共存共栄してきたのが書店界であり、それを受けいれてきたのが読者である。活字だけ読めればよい、時間だけつぶすことができれば、そしてもっぱら話題の本だけで結構というひとたちが、本屋商売を支えてきたのではなかったか。八重洲ブックセンターが売れた売れたと大変な賑いだ、その特色は一般によく売れているもの、陳列されているものよりも、そうでないものの動きが顕著であるそうだ。それは八重洲にしかないものかといえば、神田の東京堂、渋谷の大盛堂、新宿の紀伊国屋にも並んでいるものが結構多いようだ。自ら本を探す努力をせず、宣伝された八重洲ブックセンターに出かけるという読者も当世風というべきなのか。

ずいぶん主題に入るのに廻り道したが、店員の商品知識も、本を探しやすい棚も、商品

の品揃えも、愛想のよい応待も、すべて人間
II店員にかかわることなので、その問題の前
提となることについて考えてみた。

書店を魅力あるものにするのは、店で働く
個々の店員の働きの質であり、その総和であ
る。魅力のある仕事にたかめるのは当の店員
の仕事とむきあう姿が意欲的なものでなけれ
ばならない。

労働環境がよくなければ意欲的な仕事は生
れない。店員の一人一人が何よりもその人格
が認められてなければならぬ。モラル・
サーベイ(士気調査)といった本も出ている
し売っているが、正社員の仕事を臨時社員に
おきかえることにはみ腐心し、そのことを誇
り、またその事を殊更に喋々することを情報
交換と考えている出版社の一部営業マンの仕
事が看過されている間は、魅力ある書店づく
りもなかなか難しいのではあるまいか。

もっとも大切なことは、自主性が基本的に
認められているかどうかということだろう。

オートメーション時代の今日、幸いわたし
たちの仕事は人間同士のふれあいの上に成り
たっている。人間(読者)と人間(店員)の
ふれあいがロボットとのふれあいであっては

ならない。当節ばやりのシステム化もあまり
細かいところまで及ぶと、人間の働きが弾力
性を失い、つまらないものになってしまう。

魅力のある棚づくりは、担当者と客の双方
の働きかけによつて決まる。担当者が客の要
求を読みとるには、商品に対する知識も必要
であることはもちろんだが、捉われない心が
大切でそれには当然高い資質が要求される。

いかなる労働でも同じだろうが、自らの仕
事に強い好奇心がなければよい仕事は生れな
い。わたしたちの仕事での好奇心は、読者に
対してであり、商品に対してである。それに
は労働の現場だけではおそらく大したもの
は育たないだろう。本屋において本が好きになれ
なければまず失格である。本屋商売の他の商
売と異なるところは、わたしたちの商売では
商品の内容について多くの場合客の方が詳し
いことである。しかし、わたしたちはそれを
商っているのであるから、何らかの点で客よ
りもまさる部分がなければならぬ。

第一に自らの担当する棚については、すべ
ての商品を把握しなければならぬ。次にそ
れぞれの商品の自らの店での需要をよく知ら
なければならぬ。さらにそれぞれの商品の

関連を掴むことである。それも縦軸と横軸の
双方で掴むこと、ひとつは段階的に読み進め
ていくもの、いまひとつは相補的に読まれる
もの、また時にはジャンルを越えて関係する
ものも知らなければならぬ。

これらのことが判つてくると、商品知識の
拡がりにつれて、本の探しやすしい棚の構成、
品揃えが豊富になる。本に対する興味が湧い
てくれば、訪れる客に無関心ではおれなくな
る。そうなれば応待もよくなるであろう。

以上のことは容易でない。むしろ極めて難
しい。難しければなお仕事への興味も深く大
きいものになるはずである。方法へのアドバ
イスは当然のこと先輩から受ければよい。
この大変な仕事の条件づくりをするのが上
司であり、書店経営者の責任でもある。

あまりにもわたしたちは仕事を安易に流し
ていないだろうか。本屋が読者にとって魅力
あるものになるには、店員がまず魅力をもた
なければならぬし、そのためには仕事を魅
力あるものにしなければならぬのではな
らうか。店員の一人一人がその困難へ挑戦す
る自覚をもったとき、魅力ある書店が生れる
のではなからうか。

特約店の選定を終えて

■特約店委員会

人文会特約店制度は、昭和四九年に発足して満四年を経過いたしました。その間特約店の皆様・また取次店の方々にたいへんご協力をいただきまして誠にありがとうございました。本年は、『覚書』の有効期限二年間の更改時期となりましたので、会員各社のデータ（一年間の常備出荷冊数と売上カードの枚数）をもとにして協議いたしました。その選定の基準は覚書に記載されておりますように、

(1)特約店は前回の通り、会員版元一二社以上と常備契約をし、人文図書の一〇〇〇冊以上の展示・年間三〇〇〇冊以上の販売をする。

(2)準特約店は会員版元九社以上と常備契約をし、人文図書七〇〇冊以上の展示・又は二〇〇〇冊以上の販売のどちらかの条件にあること。

右の基準により選定いたしました結果、特約店一九七店、準特約店八〇店となりました（その特約店様は下記の通りです）

本年は筑摩書房が休会になっておりますので、その点も留意の上選定を行ないました。

この二年間の変化を見ますと、前回より特約店が一〇店減少して二〇七店が一九七店になり、準特約店が一店増加し七九店が八〇店となりました。このように特約店が減少した理由は、書店様が人文図書の仕入に消極的になった結果なのか、会員社の常備出荷が厳しくなったためなのかは軽々に判断できませんが、人文図書の集中展示店が数年前に比較して固定化してきたということはいえそうです。ただ残念なことに特約店各位の売上カードの送付が数年前に比べてあまり良くなっているという感じがします。ご多忙のことは存じますが、売上カードは必ずご送付下さるようお願いいたします。

今後、より一層人文図書の普及に努力いた

しますので、よろしくご協力を賜わりますようお願いいたします。

78年 人文会特約店一覧表

(△印は準特約店)

- ▲千代田▽紀伊国屋日比谷店 丸善ブレスセンター支店 三省堂本店 三省堂アネックス 書泉ブックマート 書泉グラウンデ 信山社 ウニタ書舗 中央大学生協駿河台店 茗溪堂 丸善お茶の水支店 東京堂書店 旭屋水道橋店 明治大学生協 法政大学生協 △政文堂
- ▲中央▽八重洲ブックセンター 丸善本店 旭屋銀座店 近藤書店 △教文館 △福家書店
- ▲港▽虎ノ門書房 慶応大学生協
- ▲台東▽明正堂京成店
- ▲文京▽東京大学生協
- ▲大田▽栄松堂蒲田店
- ▲渋谷▽旭屋渋谷店 紀伊国屋渋谷店 大盛堂書店 三省堂渋谷店 △青山学院購買部 △国学院大学生協 △渋谷書店
- ▲目黒▽八雲堂書店 東京大学生協駒場店 三省堂自由ヶ丘店 △恭文堂書店 △東京

都立大学生協

- △世田谷▽近藤書店 パルキリン堂 △レイ
クヨシカワ △紀伊国屋玉川店
- △新宿▽紀伊国屋書店 三省堂新宿西口店
多磨書店 芳林堂高田馬場店 三省堂高田
馬場店 早稲田大学生協 敬文堂 △広文
堂早大正門前店 △成文堂書店
- △中野▽明屋書店
- △杉並▽書原 △ブックセラーズ西荻 △積
文館狹窪店 △明治大学生協和泉店
- △豊島▽芳林堂書店 新栄堂書店 三省堂池
袋店 旭屋池袋店 西武ブックセンター
- △立教大学事業部
- △練馬▽△ブックセラーズ桜台
- △武蔵野▽紀伊国屋吉祥寺店 弘栄堂吉祥寺
店
- △三鷹▽第九書房
- △府中▽啓文堂書店
- △国分寺▽△三成堂書店
- △国立▽東西書店 △一橋大学生協
- △立川▽鉄生堂 オリオン書房
- △八王子▽くまざわ書店本店 中央大学生協
多摩店
- △町田▽久美堂書店 久美堂小田急店 有隣

町田店

- △川崎▽江崎書店向ヶ丘店 △有隣堂川崎店
△ソープン堂川崎店 △文学堂
- △横浜▽有隣堂伊勢佐木店 有隣堂西口店
栄松堂ジョイナス店 △神奈川大学生協
- △慶応大学生協日吉店 △横浜国立大学生
協 △横浜市立大学生協
- △横須賀▽△平坂書房
- △厚木▽有隣堂厚木店
- △平塚▽東海大学協助会 △サクラ書店駅ビ
ル店
- △藤沢▽有隣堂藤沢店 西武ブックセンター
- △松戸▽△辰正堂書店 △多田屋松戸店
- △市川▽弘栄堂市川店
- △船橋▽弘栄堂船橋店 三省堂西船橋店 旭
屋船橋店 △芳林堂津田沼店
- △柏▽プラザ浅野書店
- △千葉▽セントラルプラザ多田屋 キデア
ンド書籍部 △改造社千葉店
- △土浦▽共栄堂書店
- △桜村▽△丸善筑波大学会館店 △丸善筑波
大学第一学群店
- △水戸▽鶴屋ブックセンター 川又書店駅前
店

宇都宮▽落合書店オリオン店 △落合書店
パンベ店

- △大宮▽新栄堂大宮店
- △川口▽△岩淵書店
- △蕨▽△須原屋蕨店
- △浦和▽須原屋書店 △埼玉大学生協
- △高崎▽△新星堂高崎店 △天華堂書店
- △前橋▽煥乎堂 西武ブックセンター アル
プス社
- △長野▽平安堂長野店 △長谷川書店
- △松本▽遠兵
- △沼津▽マルサン書店宝塚店
- △静岡▽江崎書店 谷島屋書店 吉見書店
- △清水▽△戸田書店
- △浜松▽谷島屋書店 △谷島屋遠鉄ビル店
- △豊橋▽精文館書店 △精文館西武店 △新
曙書房
- △名古屋▽三省堂名古屋店 星野書店近鉄店
丸善名古屋支店 ニッシン上前津店 正文
館書店 ちくさ正文館書店 枳中三洋堂
- △日進堂桜山店 △名古屋大学生協南部店
△日本福祉大学生協
- △岐阜▽大衆書房 自由書房 △星野書店近
鉄店

- ▲四日市▽白鳩
 ▲津▽△別所書店 △別所書店11ビル店
 ▲大阪▽△西武ブックセンター
 ▲大阪▽旭屋本店 旭屋駅前店 紀伊国屋梅田店 旭屋アペノ店 ユーゴー書店 △阪急百貨店書籍部 △青泉社 △駿々堂京橋店 △トップベンセールズ
 ▲豊中▽△大阪大学生協石橋店
 ▲吹田▽関西大学生協
 ▲高槻▽コーベックス高槻店
 ▲東大阪▽ヒバリヤ書店
 ▲京都▽京都書院 京都書院インズミ店 丸善京都支店 京都駿々堂京宝店 オーム社書店 ナカニシヤ書店 葵書房 同志社大学生協 京都大学生協 △アオキ書店 △立命館大学生協衣笠店 △山本聖文堂 △りーぶる京都本社 △ミレー書房 △龍谷大学生協
 ▲奈良▽南都書林
 ▲和歌山▽宮井平安堂 △宇治書店
 ▲神戸▽淳久堂書店 日東館書林 海文堂書店 コーベックス ユーカリ南天荘 神戸大学生協学館店 △丸善神戸支店
 ▲西宮▽関西学院大学生協
 ▲姫路▽誠心堂書店
 ▲鳥取▽駅前富士書店
 ▲松江▽千鳥書房 今井書店
 ▲岡山▽紀伊国屋岡山店 弘栄堂岡山店 細謹舎書店 丸善岡山支店
 ▲広島▽紀伊国屋広島店 平和書房 丸善広島支店 △広島大学生協 △広島積善館
 ▲金正堂書店 △広文館本通り店
 ▲山口▽文栄堂書店 文栄堂大学前店
 ▲下関▽△中野書店
 ▲高松▽宮脇書店
 ▲徳島▽△小山助学館
 ▲高知▽金高堂書店 △高知大学生協
 ▲松山▽丸三書店 紀伊国屋松山店 △明屋書店大街道店
 ▲北九州▽金栄堂書店 ナガリ書店
 ▲福岡▽福岡金文堂 積文館書店 りーぶる天神 紀伊国屋福岡店 九州大学生協箱崎店
 ▲長崎▽好文堂書店
 ▲熊本▽長崎書店 まるぶん 紀伊国屋熊本店
 ▲大分▽本町晃星堂 △明屋書店大分店
 ▲鹿児島▽金海堂書店 春苑堂ブックプラザ
 ▲旭屋鹿児島大学生協 △旭屋鹿児島店
 ▲那覇▽球陽堂書店
 ▲福井▽ひまわり書店
 ▲金沢▽うつのみや書店 北国書林 北国書林片町店 福音館書店 金沢大学生協
 ▲富山▽清明堂書店 △富山大学生協
 ▲新潟▽紀伊国屋新潟店 万松堂書店 北光社書店
 ▲福島▽岩瀬書店コルニエ店 △岩瀬書店
 ▲郡山▽東北書店 △西武ブックセンター
 ▲仙台▽アイエ書店 アイエ書店駅前店 宝文堂書店 金港堂書店 高山書店 丸善仙台支店 東北大学生協川内店
 ▲山形▽遠藤書店 八文字屋書店
 ▲秋田▽加賀谷書店
 ▲盛岡▽第一書店 東山堂書店
 ▲青森▽成田本店
 ▲弘前▽今泉本店
 ▲函館▽森文化堂
 ▲札幌▽旭屋札幌店 三省堂札幌店 丸善札幌支店 富貴堂 紀伊国屋札幌店 なにわ書房 りーぶるなにわ 北大学生書房 △ブックストアテネ
 ▲旭川▽三省堂旭川店 ブックス平和

△帯広▽田村書店

以上 特約店 一九七店
準特約店 八〇店
計 二七七店

九州地区研修旅行から

■販売委員会

恒例の特約店中心に、書店訪問による研修旅行を一〇月三日～一〇月七日までの五日間の日程で行いました。

今回は日坂宮口王子流通センター所長、東販掘書籍部次長にご同行をお願い、九州地区（宮崎市、鹿児島市、熊本市、長崎市）の書店さんをお訪ねしました。

訪問した書店さんにはお忙しいところ会のために時間を割いて下さり誠にありがとうございます。また閉店日にもかかわらずご無

理を言って、店内を拝見させていただいた書店さんには厚く御礼申し上げます。時間の都合により、充分お話を伺うことの出来なかった書店さん、訪問をとりやめた書店さんには衷心よりお詫び致します。

お聞きしました種々の事柄を今後会の活動に生かし、書店さんの人文書販売増進にいっからかなりともお役に立てるよう検討を重ねて参りたいと思います。

お訪ねしたほとんどの書店さんからお聞きした苦情は本の入荷状況についてです。

「入荷が遅いのもっと早く入荷する方法はないか、二～三週間は早い方で一ヶ月間以上もかかる」

人文図書の店頭販売は常備の回転に依存している比率が高い。

余程売れるもの以外は在庫を抱える程回転が早くない。

入荷迄一ヶ月以上かかるというのは全書籍とは思わないまでも確に日数がかかりすぎます。入荷日数を縮小することにより売上の面に影響することは大きいでしょう。

入荷についての苦情を会としても謙虚に受けとめ充分検討しなければならぬ重要な問

題であると考えております。

売上カード送付について

人文会として重視している売上カードの送付は、ほとんどの書店が行っております。

熊本市のまるぶんさんは自社売上カードにより売行分析を行い品揃え等に反映されております。そこ迄は難しいと言われる書店さんには人文図書、専門書の品揃え、仕入及販売には、売上カード送付による版元からの分析報告を有効にご利用いただきたい。

人文図書特選セットについて

このセットは大型書店からは常備品と重複するから等と言う理由で比較的歓迎されませんが、中小の書店さんからは大変喜ばれております。

鹿児島市の吉田書店さんは毎年申込み継続も上っております。毎年申込みされることにより顧客にとってイメージが定着し、売行きも伸びるものと思われれます。

全般的に売行伸長が鈍化しているとは言え、人文図書の拡充、積極的にテーマを設定したフェアの実施、ニーズを分析した品揃

えを行うことにより順調に伸びている書店、順調に伸びているとは言えない迄も落ち込みを喰止めている書店もございます。

鹿児島市の金海堂さんは店内の3/4程に専門書、人文図書を陳列し、しかも平台でフェアを行い店にポイントを持たせている。同市の春苑堂本店さんは改装して店内を一新、五年七月オープンした春苑堂プラザ店さんは若い客層も徐々に増えていることもあり今後人文書の伸びは充分期待出来ます。熊本市の長崎書店さんは最近多少増築され人文図書の拡充をはかり意欲的に販売を展開されている。

同市の紀伊国屋書店さんは品揃えとしては充実しているが、満足すべき売上にはなっていないとか。最近「めぬえ」という情報紙を発行、地元若い人達に密着した販売に努力されているので今後が期待されること。

長崎市の好文堂さんは専門書、人文書の陳列をガッチリ固め、強さを発揮されている。以上の書店とは反対に明らかに売行きが低下していると思われる書店にはそれなりの理由があるようにみうけられました。この研修を通じ感じたことは、意欲的な書店にはその成果が現われているということでした。

「新刊案内」の活用を

■宣伝委員会

隔月お届けしております人文会発行「人文図書の新刊案内」が現在のフォームになって11号と②桁の号に達しました。すでに御貴店では人文関係図書の新刊情報の媒体として読者間に定着できたことと存じます。

一般に読者はかなりの期間をもって読書計画を樹てておられるのですが、専門化が進めば進むほど手敵い壁に直面しなければならぬことがある筈で、そのとき「眼から鱗が落ちる」のは、人文図書との出会いに多いといわれております。人文図書が万学の祖(礎)といわれるゆえんであるかと思えます。

この「人文図書の新刊案内」があるいはスタンドから自由に、あるいは専門書お買上げの読者にカウンターから手渡され、読者のお役に立つことを願ってやみません。

編集後記にかえて

弘報委員会

本誌21号はお蔭様で好評を博し、朝日新聞の読書欄にも紹介され、業界の一会報……と面映い戸惑いを感じた次第です。そこで本号では信山社の柴田氏、西武ブックセンターの小川氏、大阪旭屋の海地氏にお願いをして、「魅ある書店づくり」についての小特集を組ませて戴きました。各氏にはご多忙のところをご協力賜り、厚く御礼を申し上げます。

× 最近、公取委による再販制度に関する問題が業界焦眉の課題として注目を集めておりますので、公報委員会が中心となり緊急検討会を開き、当面の対応と展望を論議しましたがとりあえず、中平会長に最近の再販問題の経緯と問題点について執筆して頂きました。ご参考までにぜひご一読賜りたく存じます。

× なお明年3月発行予定の23号では「八重洲ブックセンターをめぐる問題」を多角的に検討してみたいと考えておりますので、ご期待ください。

わが社の人文書

78年度の足跡と明年の展望

一九七八年は、出版業界およびその関連業界にとって、多事多難な年であったといえましょう。新学期の学参商品の不振、夏場の返品増加が引き続き記録を更新し、秋口には筑摩書房の会社更生法申請が話題をさらい、そして公取委の橋口委員長による出版物の再販制度適用に疑義があるとする発言、またその発言をめぐる業界内部の迷惑など、実にさまざまの動きがありました。そして八重洲ブックセンターのオープンと専門書を主体とした売上げの好調が注目を集め、書店大型化や専門店化の方向が再び論議を呼び、マスコミには「書籍」をめぐる生産、流通、販売のいろいろな側面からのアプローチが一般消費者向けに活発に行なわれました。まさしく出版業界にとっては多事多難な年でありました。そして何ひとつ解決されずに明年に多くの問題が申し送られることになりました。

人文会は、その渦中において大きく揺れ動きつつ、ひとつひとつの問題を冷静に検討し、来るべき明日への教訓とすべく努力してきました。本号では、会員社各社が、そうした波乱に満ちた一年をどのような出版活動をしてきたのか、各社のたどった足跡と明年への活動の一端を披瀝し、日頃ご協力を賜っている特約店各位へのご参考に供したいと存じます。

■青木書店

経済不況克服のきざしは依然としてみえず、また若年層の活字はなれが一般化しつつあるなかで、私たち人文・社会科学書専門の出版社にとって、一九七八年はまさに試練の年であった。一年をふりかえってみて、私たちなりの努力をかさねてきたわけだが、「講座・史的唯物論と現代」「講座・現代経済学」の刊行をはじめ、「青木現代叢書」「青木教育叢書」「青木教養選書」の充実、その他のバラエティにとんだ単行本の積極的な刊行に力を注いで、一応、順調な出版活動をおこなうことができた。刊行開始以来三年にわたった『歴史科学』復刻版(全18巻)を十一月に完結したことも記しておきたい。

来年はいつそうの発展を期しているが、大きな企画としては、まず『日本社会運動人名辞典』(A5判・七〇〇ページ、一月刊予定)をあげたい。これは、完成まで五年余の歳月を要し、わが国でも初めての画期的な試みとして、各方面から大きな期待が寄せられている。また、刊行中の講座・双書の完結とともに、新しい企画として、『アジア現代史』(全4巻・別巻1)、『階級闘争の歴史と理論』(全3巻)、『講座・資本論研究』(全6巻)の刊行、さらに『真下信一著作集』(全5巻)、『小川太郎著作集』(全6巻)の刊行を計画している。これら大型企画のほか、各専門分野にわたって、現実の諸課題に積極的にとりくむ人文・社会科学図書書の刊行を推進し、読者の要請にこたえたいと考えている。

■大月書店

本年十一月、『コミンテルン資料集』（全7巻）『マルクス資本論草稿集』（全15冊）の二大企画がスタートした。両企画は完結までに四十年の歳月が必要とならうが、『出版界の長距離ランナー』（『巷説出版界』）の名を汚すことなく、着実に刊行を進めていきたい。社会主義の未来像と実践への理論的アプローチとして、昨年末発刊した『スターリン問題研究序説』に続き、田口富久治著『先進国革命と多元的社会主義』、カルデリ著『自主管理社会主義と非同盟』、エレンステン著『スターリン現象の歴史』増島宏編『日本の統一戦線』を刊行したが、ユーロコミュニズムに対する関心の高まりもあって好調であった。この領域は学問的にも未開拓のところであり、今後ともさらに深い究明をしていきたい。日本の現実が生み出す課題に国民の立場から応えていくものとしては、日科編『日本の食糧問題』、婦団連編『婦人のあゆみ百年』、川上武編『日本医療の経済学』、渡辺佐平編『民主的行政改革の理論』等を出版した。経済不況下で困難をかかえる各層読者の期待に合致できたものと確信している。こうした学術書とは趣きを異にした若い世代への普及書『愛の復権』、いぬいたかし著『みえない私たちとの出会い』が、予想を越えて売れたのは教訓的である。学術書の入口にある読者をどう結集するか。

明年、当社は『経済学辞典』、『労働運動・市民運動の法律事典』等年来の企画の実現を始め、人文書の出版にも力を入れたい。

■紀伊國屋書店

七八年度小出版部の出版を振り返りますと、コーバリス・ビール著『左と右の心理学』、ラックマン・フィリップ著『心理学と医学のあいだ』、フォン・フランツ著『ユング』等心理学の分野が大変好評で版を重ねることができ、今さらながら心理学の安定した根強さを感じました。

『カプセル叢書』（全11巻）は従来のコミュニケーション論の分野に新たな視点を拓くべく、一月に中野収著『ピートルズ現象』、日向あき子著『視覚文化』、宇野久夫著『髪形の知性』を、五月に福永陽一郎著『演奏の時代』、後藤和彦著『ファッショナブルな風景』の計五点を刊行致しました。書店の方からジャンルの設定が難しいとのお話がありました。メディア論や文化・風俗習慣、都市空間といった棚に展示していただければと思います。来年度も引き続き刊行予定がございますのでご協力の程よろしくお願い申し上げます。

七九年刊行予定としましては、『文化人類学叢書』がございます。これは社会学、哲学等との関連から幅広く考察し、従来の文化人類学には見られない新鮮な企画となっております。

『公正の原理とはなにか』（J・ロールズ）社会的正義とはなにかについて、社会政策、経済政策等の判断に基準を与えるものであり、本書は相当な反響を呼ぶことと思われれます。

■ 勁草書房

七八年度の小社における特筆すべき出版は、なんといつても『吉本隆明全著作集(統)』(全15巻)の発刊であろう。さきに同著者の『全著作集』(全15巻)が完結して以来、その後の著作を網羅したものを……という読者の声に応じて企画されたものである。戦後日本の文学と思想の上に独自の位置を占めた著者は、現在、壮年期の円熟せる活動をつづけつつあるが、その思想的文学的営為は多岐にわたり、いよいよ深まっている。本著作集はその一つのつづまりといえよう。本年は、第一回・思想論Ⅱ(情況・情況への発言)、第二回・作家論Ⅰ(源実朝)・第三回・作家論Ⅲ(書物の解体学)を刊行した。

七九年は、もう一つシリーズものの統篇として『思想学説全書(統)』をスタートさせる。既刊分11点は、ベルグソン(淡野安太郎)、カント(岩崎武雄)、フォイエルバッハ(城塚登)等、いずれも入門書の古典として定評のあるものである。統篇には中堅研究者を大幅に導入してイメージの一新を計る。ソクラテス(山田靖夫)、アウグスティヌス(服部英次郎)、トマス・アクィナス(稲垣良典)、パスカル(中村雄二郎)、ベーコン(花田圭介)、ロック(小池英光)、ヒューム(杖下隆英)、スピノザ(竹内良知)、ヘーゲル(細谷貞雄)、マルクス(城塚登)、キルケゴール(相原啓一)、ニーチェ(大島康正)、フッサール(立松弘孝)、メルロー・ポンティ(木田元)、ウイトゲンシュタイン(黒崎宏)、ヤスバース(鈴木三郎)

■ 現代思潮社

小が大を兼ねるといふ諺革命を思わせる八重洲ブックセンターの開店は、様々な問題を抱えた今年の出版界でのひとつの事件でしょう。

さて、九段の怪紳士の怪気炎ではないけれども、造るから返えるのか、返えるから造るのか、注文は返品を凌げるか、の返品問題もさることながら、企画のたちにくいご時世にかぶせて昨今の不景気には目をおおいたくなる思いです。

六〇年代といい、高度成長時代といい、世の中も人間も荒廃させられたのか、最近のオールノッペラボーは不気味です。勉強不足を痛感しております。

日本学、古典帰り、民俗学がふにやふにやの顔をしてまかり通り、かすかな購読者を動員してはいるものの根はどんなものでしょうか。小社の『日本古典全集(覆刻)』の固い手ざわりに胸をかり、日本の企画を練っているところですよ。

西洋から日本を見極めることの限界を知らない新刊は出しません。その辺の企画では、まさに造るから返えるのです。来年は「出版社」ではなく元々の「出版屋」への旅立ちです。

残る本、残すべき本、需要度の把める本を志し、あらためて受注産業でないことを腹に決め、委託制度で痛めた体を強い体質へ変えて行こうと考えています。

■社会思想社

小社ではベストセラー『ルーツ(上・下)』の刊行を記念して昨年の二月六日から四日間著者A・ヘイリー氏を招きました。その時の講演をムック風にまとめ『ルーツと私』として刊行しました。また軍事評論家として活躍した小山内宏氏の『世界の軍事情勢』はタイムリーなこともあって話題の書となりました。つづいて『孤独』(J・タンナー)も世相を反映してか、二刷、三刷と好調な出足です。本年度第二期の完結を予定していた『日本古代文化の探究』シリーズは『池』『鏡』の二冊のみの刊行となり、『蝦夷』『戦』は来年刊行の予定です。そして本年末まで特価期間のある『河合栄治郎全集』(全24巻)は一〇年ぶりの再刊のこともあって予想以上の注文を頂いております。さらに本年末にはソビエトの亡命画家によるエッセイ風自叙伝『モスクワの聖なる愚者たち』(ユリー・クーパー)が刊行されます。本書は現代モスクワの若者の姿をリアルに描き出している点からも注目される書として期待しています。また来年度には朝日新聞で話題となった『老人』『河岸の館』を刊行する予定です。著者ユリー・トリフォノフはソビエトの現代作家であり、『老人』ではソビエト社会を根本から問い直す問題提起を行ない衝撃を与えています。最後に今春刊行が予定されていたA・トインビーの遺著『人類の母なる大地(上・下)』は、鋭意進行中であり、本年末に上巻、来年三月に下巻が刊行される予定です。

■春秋社

文化功労者授賞の中西悟堂『定本野鳥記』(全15巻)が九月から毎月一冊刊行開始となった。それらのうち第9巻以降の新稿部分は来年の配本として期待される。また高柳光寿『新書戦国戦記』(全10巻)が完結した。おびただしい戦国ものの中で正統派の位置を固めるだろう。

『講座密教』(全5巻)は今年度『密教の文化』、『密教の理論と実践』の2冊が刊行され、最終回配本の『密教小辞典』を残すのみとなった。なお講座シリーズとしては更に『講座道元』(全8巻)、『講座大乘仏教』(全10巻)が進行中であり、それぞれ来年の上期、下期には刊行開始の予定である。

『ベルナノス著作集』(全5巻)のうち本年は第4巻『月下の大墓地/イギリス人への手紙』だけに終わったが、残る2巻を来年には完結させたい。また『チェスタトン著作集』(全10巻)のうち第10巻『新ナポレオン奇譚』が刊行され、明年早々の第8巻『ヴィクトリア朝の英文学』をもって完結のはこびとなる。

辞典類では『禅語小辞典』『芭蕉事典』がそれぞれ好評を得ている。さらにヒューマンドキュメントとして『生れ来る子への手紙』と『愛のある村』は、現代に生きる人間に力強い指針を与えるものと自負している。そのほか専門書の分野では『古代インドの説話』『シャーマニズムの世界』が収穫であったし、『日本語ブーム』の氾濫に抗して『文章のすずめ』2巻が幅広く迎えられた。

■晶文社

今年の春、小社刊行物の主題を整理してみたところ、(1)子供と教育、(2)デザインとユートピア、(3)アジア、という三つの方向が浮びあがってきました。

(1)に関しては、私市保彦氏の『ネモ船長と青ひげ』をはじめとして、今江祥智、山中恒、上野瞭という児童文学者三氏のエッセイ集など、子どもの文学の歴史と現状を論じた書物がめだちます。

(2)に関しては、詩人・安藤元雄氏の住民運動論集『居住点の思想』、新島淳良氏のコミューン便り『阿Qのユートピア』、戸井十月氏の七〇年代デザイン論『旗とポスター』などがあります。

(3)に関しては、高橋悠治氏の『たたかう音楽』や渡辺健夫氏の『インド青年群像』など、今日のアジアの文化や生活を直接あつかった書物のほかに、アメリカに生きるアジア人の手になる一群の自伝的作品——八島太郎『あたらしい太陽』、ジョン・オカダ『ノー・ノー・ポイ』、マキシーン・キングストン『チャイナタウンの女武者』があります。

いずれの主題も、来年以降の小社刊行物によって、さらに深められたしかたで、あつかわれつつけることになりました。

このほかにも、W・H・オーデン『わが読書』、ポール・オリヴァー『ブルースの歴史』、フランセス・イエーツ『世界劇場』などの大冊が好評を受けました。また、『長谷川四郎全集』（全十六巻）が完結しております。

■誠信書房

“人間——この未知なるもの”を課題とする小社の本年度の足跡は、(一)社会と個人、(二)人間性の病理と治療、(三)生物体としての人間探究、(四)幼児性の問題等にまとめられます。

(一)専門書にして大部な『対人関係の心理学』や『社会行動』の両著が、砂地に水の如く読者に受け入れられたのは、その基底を覗く時、震撼させられるものを感じます。また、『社会交換』、『対人知覚』、『同調行動』、『対人的魅力』（現代社会心理学の動向）も同じ準拠枠で解せられるものです。

(二)『非行をどのように治すか』、『若年化する自殺』、『子殺し』等の増刷りにみられる意味は、社会のあるものが、若者や弱者に日々絶えずマイナス・カードを押しつけているその反証とみられないこともありません。その状況下『心理療法を学ぶ』はセラピスト初心者への啓示であり、『無意識の探求』、『フロイト生と死』が読者に許容される現代は、主観による客観世界への訣別を告げる警鐘なのでしょうか？

(三)人間の脳に焦点を当てた企画が数点出版されていますが、小社の『脳の言語』も「脳・心・行動」の必読文献として好評です。

(四)最後に『ことばの獲得と思考の発達』、『児童発達の動作学』、『乳幼児の知性』、『六つの文化の子供たち』では、心理（言語・発達）、教育、人類学の各分野より必ずや児童研究の領域を深化させるものと信じます。

■東京創元社

売行きが冴えないので本年は文庫を除いては新刊活動を若干手びかえた。特に人文関係の図書ではこれと言つて見るべきものがなかったことは、お恥しい次第である。

六月に現代社会科学叢書で『政治と言語』（クラウス・ミュラー著、辻村、松村共訳）を刊行した。言葉と民主政治の関連を考察した新しい研究として注目を集めている。

一一月の末に単行本で小倉豊文著『雨ニモマケズ手帳』新考』が出た。これは昭和二十七年に刊行した同氏の『宮沢賢治の手帳研究』を新資料により全面的に改訂した新稿で、法華経の大きな影響を受けた賢治の思想の根底を探った著者永年の研究の結実である。

遅延を重ねていた『新篇東洋史辞典』（京大東洋史辞典刊行会編）（予価六〇〇〇円）が来春にはようやく完成する。エジプトから朝鮮半島までの最新の史的研究成果が盛り込まれている。

小社では昭和十七年に野上豊一郎編『能楽全書』（全6巻）を刊行した。戦後二八年にその改訂新版（全5巻）を出して好評を博したが、今回その両方を総合し、更に近年の研究で明らかになった成果等を示す新稿も若干加えた『綜合能楽全書』（全7巻）を準備している。六〇余名の執筆者が能・狂言を文学、芸能、歴史、演出、芸談等、多面的に解明したもので、永く復刊を待たれていたものである。準備に手間どっているが、五、六月頃刊行の予定である。

■東京大学出版会

相良亨『本居宣長』は歌と神道に象徴的な日本思想の最高峰、秋の読書界に断然好評を博しており、小野沢清一・福永光司・山井湧『氣の思想』は道、理を成立させる根源として中国思想の核。『講座宗教学』（全5巻）が好評裡に完結。稲村博『子どもの自殺』、今村護郎『行動と脳』が版を重ねています。

「学問は歴史に極まり候事に候」とは小林秀雄氏が引用する徂徠の名言ですが、わが社の七八年は歴史に始まり歴史に極まったといえます。四月から刊行の野沢豊・田中正俊編の『講座中国近現代』（全7巻）は鄧小平氏来日の十月に完結。阿片戦争から人民共和國成立まで資本主義との闘争の革命は優れて経済史であり、今日の国際問題と深くかかわる歴史の背景が貫かれています。永原慶二『歴史学叙説』、網野善彦『中世東寺と東寺領荘園』、義江彰夫『鎌倉幕府地頭職成立史の研究』、奥田勲『明恵』、小林清治・大石直正『中世奥羽の世界』、富永幸生・鹿毛達雄ほか『ファシズムとコミンテルン』、和田春樹『農民革命の世界』は歴史に興味ある人に見逃せない好著群。日本史の根本史料、東京大学史料編纂所編『大日本史料』の編別復刊は一大朗報であります。

七八年〜八〇年に完成予定の東京大学社会科学研究所編『ファシズム期の国家と社会』（全8巻）は日本および世界の政治・経済・社会・法律の構造的特質と思想行動の相互連関を総合し一九三〇年代の歴史の課題に応えんとするもので広範な読者が期待されます。

■日本評論社

人文書分野では比較的弱い小社ですが、この一月末より刊行を開始した『体系・日本現代史』（全7巻）は、期待される講座のひとつです。内容は、第1巻・日本ファシズムの形成／江口圭一編（既刊）をはじめ、明年早々刊行の第2巻・一五年戦争とアジア／今井清一編、第3巻・日本ファシズムの確立と崩壊／木坂順一郎編、第4巻・戦争と国家独占資本主義／中村政則編、第5巻・占領と戦後改革／神田文人編、第6巻・冷戦下の日本／藤原彰編、第7巻・アジアの変革と日本／佐々木隆爾編からなるもので、日本現代史の実像を正確に把握することの重要性をかんがみ、学問的検証をへた豊かな史実を基礎として、体系的に現代への軌跡と当面する課題への視点を明らかにすべく、気鋭の学究がその研究成果を結集したものです。研究者、学生、教員の方々にはぜひ一読をおすすめする講座といえます。

また『講座・現代の医学』（全5巻）は、第1巻・生物としてのヒト（既刊）、第2巻・生体の機序（既刊）をはじめ、第3巻・病態と症候、第4巻・疾病の修復、第5巻・生存と環境、からなり、現代医学の主要テーマを網羅しつつ人間生物学、医用工学、文化人類学、人類生態学等の視点をもとりいれ、医学と医療の問題を鋭く究明していきます。

なお、清水勝人著『新聞の秘密』、石川真澄著『戦後政治構造史』、室伏哲郎著『企業犯罪』（日評選書）も好評を博しました。

■福村出版

昨年より刊行を始めました『野生児の記録』（全7巻）は、第7巻『新訳アヴェロンの野生児』の刊行によって全巻完結いたしました。本シリーズは、人間の本性と教育、遺伝と環境について考察するうえで多くの示唆を与えてくれるものとして、お蔭様で各巻とも好調な売行きを示しております。本年度はこのほかに、『講座障害児教育』（全6巻）も完結し、『講座心理療法』（全8巻）、『講座現代教育学』（全9巻）もそれぞれあと一卷を残すのみで、来年年には完結いたす所存です。

小社は昭和十四年創立ですので、明年には四十周年を迎えることになりました。この四十周年を記念いたしまして、『心身障害辞典』を刊行いたします。小社はこの数年間、障害児教育図書に力を入れてまいりましたが、記念出版にふさわしいものになるよう、現在全力をあげて制作にとりかかっております。

このほか、講座ものとして、心理学の基礎的な概念をコンパクトにまとめた『基礎心理学シリーズ』（全14巻）、現代社会において、その重要性が認識されはじめた心理臨床の実践に役立つよう、事例を中心に編集した『講座心理臨床の実際』（全10巻）、学校ぎらいの子ども、非行傾向のある子ども等、子どもにかかわる諸問題を一般向けに分り易く解説した『治療教育講座』（全15巻）、言語障害の正しい理解と認識を深め、その治療方法を初めて体系的にまとめた『講座言語障害治療教育』（全6巻）の刊行を開始いたします。

■平凡社

平凡社の人文書は、人文諸科学の個別の成果をそのまま本にするのではなく、また、その成果を平易に書き直して出版するものでもありません。もとより諸科学の最新の成果は前提となりますが、しかし、諸科学が専門の枠組の中にとどまり、知識が孤立したままであるならば、人文科学は現代人の自己発見のための手がかりとならないでしょう。時間的にも空間的にも遠く離れた社会の歴史や文化の個別の研究が、現代の日本人の問題となり、現代社会を考える有力な方法となるには、そこで得られた知識や視角が、もう一度人間の生きた経験に結びつけられ、その全体像を描くのに役立てられなければならないと思います。そして、それは同時に、歴史や文化の隠れた文脈を明らかにすることに通じるのではないでしょう。阿部謹也氏の『中世を旅する人々』（六月刊）が地味な人文書でありながら圧倒的な好評をもって迎え入れられたのも、ヨーロッパの歴史学や民俗学の研究水準を押えつつ、中世社会に生きた人々の暮しと意識を具体的なイメージとして鮮やかに定着したからだと思います。また網野善彦氏の『無縁・公界・楽』（六月刊）をはじめとする平凡社選書もそれぞれ従来の専門の枠を打破して、人間と社会の歴史的经验や文化の全体をとらえようとする先端的な書物として評価されました。私たちはこうした評価一つの抛りどころとして、新しい人文書の出版を目ざしたいと思えます。

■法政大学出版社

中心企画の一つへものと人間の文化史は、三輪茂雄『白』、盛田嘉徳『河原菴物』、山田憲太郎『香料』、景山春樹『神像』、増川宏一『盤上遊戯』、田淵実夫『筆』の六点を刊行した。セーヴ『マルクス主義と人格の理論』、グレットウイゼン『ジャン・ジャック・ルソー』、ドゥルーズ『カフカ』等の叢書・ウニベルシタス、シュテークシュラー『現代哲学の主潮流Ⅰ』、アドルノ『マラー』等のへりぶらりあ選書、浅香年木『古代地域史の研究』、杉山宏『日本古代海運史の研究』の叢書・歴史学研究等も順調に点数をふやしたほか、金関丈夫『琉球民俗誌』、松山義雄『続々・狩りの語部』、柳生章『翻訳文化を考える』等の単行本も注目された。

明年は、すでにスタートしたビエール・ベール著作集のほか、森嘉兵衛著作集、デイドロ著作集、田岡嶺雲全集、クラウス著作集等の継続刊行をすすめ、さらに芸能史研究会編『日本芸能史』のスタート、へ日本社会運動史料の『無産者新聞』の完結、『プロレタリア科学』の刊行等を予定している。

このほかには、アドルノ『ミニマ・モラリア』、ポパー『推測と反駁』、ゾイナール『家畜の歴史』、橋本鉄男『ろくろ』等がある。いずれも広範な読者層に迎えられる期待の著書といえよう。

■みすず書房

この一年の出版物のうち注目をひいたもの一つに、大塚久雄『生活の貧しさと心の貧しさ』があります。丸山真男『戦中と戦後の間』につづいて読者の大きな支持を受け、すでに実売一九五四九部に達しました。社会科学書では、玉野井芳郎『エコノミーとエコロジー』、石田雄『現代政治の組織と象徴』、赤羽裕『アンシアン・レジーム論序説——18世紀フランスの経済と社会』などいづれも、新鮮な視角と学問的水準で評価を受けております。

言葉のコミュニケーションで独創的な活動をつづけている外山滋比古八表現論√五部作が『修辭的残像』（68年）から一〇年を経て、新刊『異本論』でついに完結いたしました。

明年の企画ではまず『続・現代史資料』（全12巻）があります。『現代史資料』（全45巻）は七六年に完結したが、収集した資料にはなお学界未知の貴重な堆積があり、研究者の要望にこたえ、その続刊に踏み切りました。テーマは、憲兵・思想警察・人民戦線・中共謀報団事件、占領地工作、大正期資料その他による編成です。

小社刊『ロマン・ロラン全集』（全35巻）は完結後一二年を経、品切のため古書の高値で読者各位に御迷惑をおかけしておりますので、5巻を増補し決定版として全40巻を新春より発行いたします。さらに、最近、切実さを加えつつある環境科学の先駆的学者の業績として、『三沢勝衛著作集』（全3巻）も明春の発売予定で、いづれも内容見本準備中、御期待下さい。

■未来社

今年、女性問題を考える一連の企画が、確かな手ごたえで読者に迎えられた。伊藤雅子『女の現在』、一条ふみ『永遠の農婦たち』、丸岡秀子『めぐり合い百集』などである。『丸岡秀子評論集』（全4巻）も刊行中である。女性の側からする現実への発言が、現代の日本の社会的ゆがみに鋭い批判を加えたといえる。来るべき年においても、例年どおり、単行本を中心に出版活動をつづけるが、一九世紀ロシアにおける諷刺文学の巨匠シチェドリンの『選集』（全8巻）がいよいよスタートする。現代にもそのままつきささるその諷刺の矢は、広く読者の共感を呼ぶだろう。また、『千田是也演劇論集』（全10巻）は、日本の新劇運動の全体像をうかがいあがせた画期的な評論のかずかずを収める。昨年第一期全25巻を完結させた『宮本常一著作集』は、民俗学会のみならず深い反響を各界に与えたが、今年も、宮本常一『旅人たちの歴史』、『民具学の提唱』などが刊行される。後者は神崎・上江州・工藤『沖繩の民具』とともに『有形民族文化双書』のスタートをなすものである。その他、細見英造遺稿集『経済学批判と弁証法』、江口英一『現代の「低所得層」』等の大著が相次いで刊行される予定である。しかし今年度は、筑摩書房の会社更生法申請と、八重洲ブックセンターの異常な売上げという、両極端の悲喜劇の谷間で、出版界は大ゆれにゆれたといえよう。その谷間には、マンガ本の老大化と返品率増加という現象も横たわっている。心して次年度を迎えねばならない。

■有斐閣

一九七八年中に刊行した有斐閣の人文書の最も大きな特色は、心理学の分野の充実です。『心理学小辞典』（5月刊）、『心理学』（全6巻）の完結——いずれも有斐閣双書——をはじめ、有斐閣新書では、『心理学入門』、『発達心理学入門』、『教員養成論』、『家族関係の心理』、『親子関係の心理』、『思春期の心理』、『職場の人間行動』、『心の病』、『フロイト著作と思想』、『森田正馬精神療法入門』と、一挙に10点の新刊を加え、有斐閣選書では『こどもの発達・学習・社会化』、『カウンセリングを学ぶ』、『有斐閣ブックスでは』、『テキストブック心理学』（全8巻）のうち6巻を刊行し、高水準の専門研究書としては、三隅不二著『リーダーシップ行動の科学』（11月刊）が本年の注目すべき収穫です。

社会学の分野では、新書の『社会学入門』、『ヨーロッパ・アメリカ・日本の経営風土』、『ブックスの』、『テキストブック社会学』（全7巻）完結があります。哲学・思想の分野では、新書の『ルソーエミール入門』、『ヘーゲル論理学入門』、『教育思想史』、『選書の』、『現代哲学を考える』などが主なものです。

来年は、前記の『テキストブック心理学』が全8巻完結し、新書では『社会思想史』（全2巻）、『近代日本の思想』（全3巻）、『家族社会学入門』、『社会福祉入門』、『マス・コミュニケーション入門』、『デカルト方法叙説入門』、『ルソー著作と思想』、『マックス・ウェーバー著作と思想』その他を予定しています。

■吉川弘文館

吉川弘文館は、専ら日本史学一筋の出版に励み、とりわけ古代史関係は基礎的文献をはじめ、精緻な個別研究書、学界の水準を示す論文集、便利な研究史、簡潔平易な通史概説、正確な伝記等、すでに二百余点に達しました。

本年は、井上光貞博士還暦記念会編『古代史論集』（全3冊）、竹内理三博士古稀記念会編『統律令国家と貴族社会』、『統荘園制と武家社会』、『末松保和博士古稀記念会編』、『古代東アジア史論集』（全2冊）、弥永貞三先生還暦記念会編『日本古代の社会と経済』（全2冊）いずれも、かつてない重厚な論文集をあい次いで刊行し、今後の研究に裨益するところ誠に多大に高く評されました。同時に、個別研究でも栗原朋信著『上代日本対外関係の研究』、『福井俊彦著』、『交替式の研究』、『磯貝正義』、『郡司及び巫女制度の研究』、『松嶋順正編』、『正倉院宝物銘文集成』、『日崎徳衛著』、『西行の思想史的研究』など、『古代史のいしずえ』を世に送りました。さらに中世史から近代史に及ぶ多彩な業績（新刊90点・重版107点）を数えます。

学界・読書界待望の『国史大辞典』（全15巻）は、編集・製作に完璧を期し、当初の予定より遅延しておりましたが、いよいよ来年1月下旬刊行の運びとなりました。各学界のベストメンバを動員すること二千数百名、最新・最高の内容を盛り、総項目四万二千余、日本歴史の全領域をおさめ、更に関連諸科学の分野に及ぶ、空前の大辞典です。ご期待下さい。

わが国最大精確無比の日本歴史大辞典

国史大辞典 全15巻

(内索引1巻)

昭和54年1月下旬
刊行開始

第一回配本

第一巻(あ〜い)

特価 八、八〇〇円
(特価締切54年8月31日)
定価 一〇、〇〇〇円

今日の日本史学界の最高水準を示す画期的な日本史辞典です。項目は日本史学を中心として関連隣接諸分野に及ぶ広い範囲から大・小項目で厳選し、原稿は各分野の最適任者が責任をもって執筆した、質量ともに最大の辞典です。解説は高度な内容をわかりやすい文章で叙述し、豊富な写真や正確な図版、詳細な表・系図等を多く用いて、視覚的にも理解しやすいように工夫されています。研究者・学生をはじめ、学校・図書館・一般読書人にとっても必備の辞典となるでしょう。

吉川弘文館

東京都文京区本郷7-2-8/電話(03)813-9151

大月書店の2大企画

コミンテルン 別巻1 資料集

村田陽一編訳

質量ともに従来の諸版を凌ぐ世界最大のコミンテルン資料集。◆第一回/第一巻 定価八五〇〇円・特価八〇〇〇円(79年2月末日迄)

マルクス資本論 (予定) 草稿集

草稿集翻訳委員会訳

新メガ第二部の資本論準備草稿類を完訳。マルクスの天才能の思考の全容がはじめてその原形で姿を現わす。◆第一回/④ 定価四〇〇〇円

東京文京本郷2-11●電話03(813)4651

藤井一行著

46判 ¥1600

民主集中制と党内民主主義

レーニン時代の歴史的考察 民主集中制の原理は、どのような意味で真に前衛党の生命力となるか。その本来のあり方を探った問題作!

犬丸義一著

(青木現代叢書) ¥1400

日本人民戦線運動史

日本における統一戦線・人民戦線運動がどのように推進され挫折していったかを、綿密な史料考証をつうじて叙述した労作!

好評発売中

ドラマを解剖する

¥1300

M・エスリン/山内登美雄訳 舞台、映画、テレビ、ラジオ等のドラマに通底するものについて、著者の長年の現場体験をもとに展開される今日的ドラマ論

遺伝子操作の幕あけ

¥2200

Mロジャース/渡辺格、他訳 遺伝子操作は人類の未来をどう変えるか? 遺伝子組み替え問題の発端からガイドライン制定までの論争を生々しく描く。

ボツソウ村の人とチンパンジー

¥1400

杉山幸丸 マノン族の集落で村人と食住を共にしつつ野生チンパンジーの生態研究と村の生活の観察に打込んだ一学者の、愛情とユーモアに溢れる報告

紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3/電話(354) 0131

東京神田 青木書店 神保町1

ユキの日記

笠原嘉綱 長い闘病生活の末に分裂病となり、心を閉ざしたまま世を去った天分豊かな少女の貴重な魂の記録。一六〇〇円

別世界にて

C・S・ルイス ファンタジーとSFの架空の空間の意味から文章作法まで、創造の小径へと誘う。中村妙子訳 二四〇〇円

異本論

外山滋比古 テクストと読者の関係をあらたに問い直し、異本化の原理を確立する創造的な論考。五部作完結。二〇〇〇円

マティス・画家のノート

巨匠マティスの芸術に関する文章と談話のすべて。『ジャコ・ムッティ』に続く読む美術書の傑作。二具史郎訳 〇〇〇円

東京文京本郷3 振東0-195132 みすず書房

ジュリスト総合特集

緊急の現代的課題を総合的に解明

高齢化社会と老人問題

一三〇〇円

高齢化社会への対応を展望する

現在、日本は高齢化社会の入口に立っており急速な高齢化が予想される。本特集は老年の生活、生命、文化と社会の三点に照明をあて現状と問題点を解明し将来を展望。

東京神田 有斐閣 振替東京 6-370番

堀一郎著作集

〔全十巻〕

第2回配本／第三巻Ⅱ発売

学僧と学僧教育

名僧の宗教形態、社会的機能の考察を通じて、仏教の伝来、日本仏教の定着・民衆化の過程を叙述する学僧教育・古代教育制度の貴重な研究。月報挿入。●A5判上製函入り・定価九五〇〇円

呈 内容見本

〔既刊と続刊〕 1 古代文化と仏教Ⅱ八五〇〇円／2 上代日本仏教文化史／4 遊幸思想と神祇神道／5 神と人／6 生と死／7 民間信仰の形態と機能／8 宗教民俗学論考／9 宗教と社会変動／10 随想・書翰・日記

東京・文京 未来社 電話・代表 小石川3の7 (814) 5521

人文会々員名簿

- 役員 会長／中平千三郎 代表幹事／相田良雄
- 青木書店／山根襄 大月書店／鈴木弘 紀伊國屋書店／八木茂 勤草書房／石橋雄二 現代思潮社／安藤豊 社 会思想社／渡辺和彦 春秋社／神田治 晶文社／中村勝哉 誠信書房／矢戸玄徳 東京創元社／清水純孝 東京大学出版会／別所久一 日本評論社／醍醐隆 福村出版／福村惇一 平凡社／八木田三郎／法政大学出版局／阿部好文 みすず書房／相田良雄 未来社／石井奈良彦 有斐閣／前田昌男 吉川弘文館／川越重行(以上19社)
- (休会中会員社) 理想社・筑摩書房

平凡社

〒102 東京都千代田区四番町4
振替・東京8-29639

北京の旅

陳舜臣著／写真Ⅱ陳立人 定価1700円

念願かなって訪れた中国の首都北京を隈なく
逍遙し、その息吹きを伝える。千年の歴史を
誇るこのまちは、カオスのようにみえて、ふ
しぎとまとまりがある。アジアのまほろばで
あろうか。茜色の空の彼方は、群青の樹々に
囲まれた西方は、遙かなむかしから東海の大
和の島人たちの心のふるさとでもあった。燦
として輝く華麗な王城は、すべての勤勞人民
に解放されていた。歴史の遺跡と、文明の源
流を求めて旅するものの指標となる書。

日本評論社

体系・日本現代史(全七巻)

今井清一／江口圭一／神田文人／木坂順一郎
佐々木隆爾／中村政則／藤原 彰Ⅱ編集

本体系の対象はフアシズムの起点である満州事変か
ら現在の日本の諸課題の胚胎した時点である一九六
〇年の安保闘争までである。多くの第一線若手研究
者を執筆者に加え、学問的検証を経た豊かな史実と
統一された全体像が平易・明確に描き出されている。

Ⅰ 日本フアシズムの形成 Ⅱ 一五年戦争とアジア

江口圭一編 一五〇〇円
今井清一編 一月末刊

東京都新宿区須賀町14／振替東京0=16

法政大学出版局

ピエール・ベール 著作集 全七巻

野沢協全訳・解説
各巻A5判上製箱入

近代の黎明、スピリッツ、ロックらとはほほ時を同じくし、
神学的形而上学の仮借なき解体によつて西欧世界を震撼
させ、歴史批判の開拓者、さらに宗教的内容の旗手とし
て不滅の足跡を残したベールの全生像。●内容見本進呈

- 第一巻 彗星雑考 第一回配本・746頁・6800円
- 第二巻 寛容論集
- 第三巻 歴史批評辞典・I 第六巻 続・彗星雑考
- 第四巻 歴史批評辞典・II 第七巻 後期論文集
- 第五巻 歴史批評辞典・III

東京都港区南麻布2-8-4 振替東京6-95814

野生児の記録⑦

四六判／¥900

新訳アヴェロンの野生児

J.M.G.イタル／中野善達・松田清訳

●ヴィクトールの発達と教育 南フラン
スで捕えられた野生児を6年にわたり教育
した医師の感動的報告書。本書は19世紀
初頭に発行されたフランス語版原典より
翻訳し、さらにビネルとサン＝シモンの
興味ある関連2論文を収めたものである。

野生児の記録／全7巻完結

- ① 狼に育てられた子 ¥900
- ② 野生児の世界 ¥1500
- ③ カスパー・ハウザー ¥900
- ④ 遺伝と環境 ¥1300
- ⑤ 野生児 ¥900
- ⑥ 野生児と自閉症児 ¥1300
- ⑦ 新訳アヴェロンの野生児 ¥900

東京・文京
小石川1-3

福村出版

電話東京
813-3981

月下の大墓地

イギリス人
への手紙

ベルナノス
著作集・全5巻

聖性の作家ベルナノスが、スペイン市民戦争と第二次大戦の激流に身をすえ、仮借なき体制の恐怖政治の下で危機に瀕するキリスト教の名譽を痛切に訴えた記念碑的評論。生々しい戦争記録の中に溢れる福音的生活への勧告。
伊藤晃・石川宏訳 第3回配本④ 三六〇〇円

既刊
① 悪魔の場のもとに／よろこび 四〇〇〇円
② 田舎司祭の日記 四〇〇〇円
新ムーシエット物語 二〇〇〇円

東京外神田 2-18-6 春秋社 ☎ (03) 255-9611

小倉豊文著

「雨ニモマケズ手帳」新考

増訂 宮沢賢治の手帳 研究

本書は賢治晩年の思想を解明する鍵ともいえるべき『雨ニモマケズ手帳』の各頁を読解し、背景となる賢治の生涯と濃い翳をおとした仏教について克明に分析して評価された旧版をもとに、新資料をふまえて全面的に書き改めた決定版。その後発見された全手帳にも論及。

A5判箱入三三二頁口絵2、図版多数入
(内容見本送呈) 価二、五〇〇円

東京創元社 東京新宿新小川町

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6

無意識の探求

ユングと
の対話

R・Eヴァンズ／浪花博・岡田康伸訳 河合隼雄解説 人間の無意識を探りながら語られるユングのフロイト批判により、現代思想に多大な影響を与えた二大学者の相違点を明かすユング入門書。三〇〇円

エロスの存在論素描

平田武靖著 文化の洗礼をいまだ受けていない始源の人間幼児性と「構造化された現存在」の距離を計測しようと、精神医学の領域にメスを入れ、その存在論的根柢を問うユニークな処女論文集。三〇〇円

農民革命の世界

エセーニンとマフノ

和田春樹 一九二〇年マフノの農民軍が赤軍と全面戦闘に入り敗北の道を行く悲劇とは何なのか! 四六判 ￥1800

日本仏教のふるさと

鎌田茂雄 半島と大陸を旅し朝課晩課を共にし壮大な文化圏で現代に生きる仏教伝来の悠久を探る。UP選書 ￥900

113 東京文京本郷7-3-1 (03)811-8814・8831

非売品